

兵に好奇の目を注ぐ者もあったが、戦意喪失した部隊の空気は、虚脱感が溢れてしまい、果たして我々はこれからどうなるのかという話で、一週間程過ぎてしまった。この間何処からとなく聞こえて来た噂は、戦争も終わったことだし、いずれ近い中に川を下って日本海から日本に帰るようになる。若し体力のある者は、旧日本軍の兵舎にある物資を持てるだけ持って帰る方が得だろう、ということがまことしやかに流布されていた。

やがて移動の命令が出て、部隊は黒龍江の方に向かって行進をはじめ、途中脱走を企てた者がソ連のコンボイによって射たれ、死亡した者も出たという。二、三日歩いて黒龍江に着いたら、大きな船が停泊しており、皆この船で黒龍江を下り、日本に帰るんだと思つて乗船した。全くこの時まで、私もよもや四年もの間、ソ連に抑留されるとは夢にも思っていなかった。我々の乗った船は、下るのではなく上流へと上がりはじめ、着いた所は黒河の対岸、ソ連のブラゴエシチュンスクであった。はじめて騙されたと知り、怒つて見

ても後の祭りであつた。そして私は、このブラゴエシチュンスクより更に数日強行軍の末、ワジャエフカという地のソルホーズの収容所から、長い抑留生活に入ったのである。

慟哭のシベリア抑留で

垣間見たソ連

東京都 堀口卓也

丸太積み

ホルモリンの収容所に入ってから私がそこを去るまで、一五〇大隊という呼び名しか記憶にない。そこが二二七収容所だと小池君に教えられるまで知らなかった。貯水場に山から切り出してきた材木を三段ぐらいにてこで積み重ねる丸太積みが、ここでの私の作業であつた。五人ほどで、共同で作業するのであるが、危険な仕事であつた。斎藤准尉が小隊長で、尻を叩いてよく働かされた。何でソ連の仕事をこんなに精出して

やらなければならぬのかと、この人を恨んだものだ。

刑期が明けても自由でない

二一七収容所の営門前の鍛冶屋さんだったと記憶しているが、刑期が明けたが、移動証明が貰えないので里に帰れないという話を聞いた。日本の統制時代と同じなんだなと感じた。その後自由になったのだろうか。おとなしい鍛冶屋だったが、どんな罪を犯してシベリア送りになったのだろうか。たしか郷里はウクライナとか、その話をしたとき遠くを見る目つきになった。

「カエリタイダロウナ」

夜の点呼だったと思うが、整列している傍をソ連人が片言の日本語で「カエリタイダロウナ」と言って、我々の反応を楽しんで通って行く。ダモイということは、シベリアに来て一層感じるようになっていた。そこを刺激するのである。「ダモイ」の声に送られて営門を出たときは心が踊っていたが、それが単なる転属で、着いたところは同じような収容所であった。こういうことを何度経験したか。最悪の予想がいつもの中するのである。何もかも信じられなくなった。

滝口新太郎

一五〇大隊の奥の方に、たしか五〇大隊といったと思うが、有名な俳優の滝口新太郎という衛生兵のいる収容所があって、そこで伐採をやるために一五〇大隊から何人かが派遣された。その中に私も加えられた。おかげで滝口新太郎なる俳優を見ることができたが、さすがに美男でソ連の女医などに人気があった。色の黒い歯のきれいな人であった。

タポールの思い出

伐採の作業で木を切るとき、回りの小さい木を切りはらって作業しやすいようにするのであるが、鉛筆も薬に削れるあの鋭利なタポールで、自分の足を靴の上から親指まで切ってしまった。おかげで一か月ほど治療に専念させてもらった。雪の積もったごく近くの山のできごとである。

材木の山出し

山で伐採した木を馬ソリで運ぶのである。雪山の何本も小木のある中に切り倒された材木をどうやったらうまく運び出せるか。こういうふうにはやれと指示する

のが私の仕事で、午前中は頭が働き、すいすいとうまい手が打てるのに、午後になるとさっぱり頭が働かない。栄養の関係だろうか、実に歯がゆい思いをしたことが今も思い出される。

丸太の寸法計り

山から運ばれてきた材木の寸法を計り、記帳する役をやったことがある。鉄道線路のそばに材木を運んでくる。その材木の寸法を計り記帳するのである。材木の寸法は末口といって細い方で寸法を計るのであるが、ノルマを上げるために元口の方で計り、記帳した。おかげで各人のノルマは上がったようだが、この帳簿をみて材木を取りに貨車がやってくる。帳簿上はまだ沢山残りがあらずだのに、現場には殆どない。これは困ったことになったと思っていれば、転属になりホッとしたことを覚えていた。私の後を引き継いだ人は困ったろう。ごめんなさい。あるいはこれがばれて転属させられたのかもしれないがと、今に思う。

衛兵勤務

私は二度目の足の傷が治って一か月ばかり衛兵勤

務をした。この仕事を与えてくれた人は、憲兵曹長であつた思いやりのある、みんなから信望を集めていた人であつたが、誰かの告げ口か、憲兵であつたことがソ連に知れて懲罰大隊に送られたということであつた。この衛兵勤務で、イワンというソ連人ともう一人、タール人と三人で一月ほど過ごしたことがある。そのときの手真似を交えたソ連人との会話は楽しかった。以下項目を分けて記述してみよう。

シベリアのソ連人は算数が下手

作業隊が営門を出るとき十列縦隊になれという、十列では営門を通れないので五列でよいという。そして前から二列ずつ、十、二十、三十と数え、あとの端数は一、二、三と数えるのである。これには驚いた。私の勘定が早いので、作業隊が出ていったあと衛兵所で、算数の問題を出して私を試すのである。イワンという人は軍曹だつたと思うが、問題を出されて即座に回答を書く、それを見つめてやっと経ってから、合っているといつて目を見開いて驚くのである。この二人だけで全校を論ずるのは適当でないかもしれないが、ソ

連人の算数の能力の低いのに驚いた。

人種的偏見

ソ連は連邦共和国で、いろいろの人種があるが、ロシア人は他の人種をネロシア人といって馬鹿にする。タタール人に対してはもちろん、他の共和国の間をも田舎者といつてばかりにする。実に不思議に思ったことを記憶している。ロシアにも人種的偏見は根強くあるらしい。

死刑廃止

私が衛兵所勤務のときソ連では死刑廃止のことが世間の話題になっていたらしく、イワンが私にそのことを知らせてくれた。しかしこんなものがなくなったって、ツンドラ地帯に放り出せば死刑と同じだと説明してくれた。ソ連ではすぐまた死刑が復活したそうだが、そんなことが話題になったことを覚えている。

東京にエレキあるか

イワンに聞かれた。東京という地名は知っていて、東京にエレキがあるかというのだ。もちろん電気はあるというと、自動車はあるかと聞く。シベリアだけし

か知らなかったのかもしれない。このイワンに地下鉄のあることまで教えたが、彼は信じられないという顔ををした。信じたかどうかはわからないが、とにかく日本人は文化人だということだけは信じたようであった。宇宙船まで開発しているソ連なのに、文化の浸透は今もあまり進んでいないのではないだろうか。いろいろのことが思われるシベリアである。しかし音感はたしかで、楽器の扱いは優れていたように思う。

コンボーイ

一時他の収容所に作業に行つて二一七収容所に戻り、炊事の水汲みの仕事をしているときのことであるが、馬ソリに大きな桶を積んで水を汲みにコンボーイと一対一で森の中に入ったとき、例のマンドリンを突き付けられて持ち物を全部略奪された。割れた欠けらの鏡まで貴重品なのである。私の速記用のシャープペンシルも奪われたので、これは命から二番目の大事なものだ、と、血相変えて取り戻す気配を見せたところ、コンボーイは素早く飛びずさり、サッとマンドリンを構えた。私はここで撃たれて、逃亡しそうになったから撃

ち殺したなどと報告されたのではたまらないと思ひ刃向かうのをやめた。すっかり落ち着いた時期であったが、シベリアには文化的なものは、楽器を除いて少なかった。

スターリン ネーハラシヨ

伐採で雪山に入ったとき、同じくソ連の囚人がこの山に入り、一囚人と遭遇したところ、この囚人は首に十字架のペンダントを下げており、「スターリン ネーハラシヨ」と言い、私を指さして「ダモイ」したらスターリンの首を切ってくれと、自分の首を手刀で切る真似をして「スラー」と言うのである。遠くに人影を認めるとさっと森の中に消え去ったが、ソ連の一面を見たという感じであった。

抑留記

千葉県 綾部 栄次

私は戦時中旧満州国奉天北陵に住んでおりました。昭和二十年現地召集をうけ、これで二回目の軍隊生活でした。一回目は北京、南京と転戦しましたが、こんどは満州に産み月の妻と一歳の子を残しての入隊は何か不安でたまらなかった。

八月一日、後髪引かれる思いで新京第二六〇〇部隊に入隊、南嶺の法政大学が兵舎であった、その頃には兵器は充分に無かったようだった。

私の任務は奉天から一緒であった大橋兵長と司令部間を自転車で伝令するのが任務でした。他の兵隊達はソ連軍の侵入に備えて蛸壺掘りが主な任務だった。

八月九日の夜、満人部落に爆撃があった。それから急遽部隊の編成替えが行われ、私は南嶺湖の土手を切る斬込分隊に組み入れられたが、伝令の仕事は続けら